

平成 26 年度
広島市専門家評価
評価報告
(深川小学校)

平成 27 年 3 月

広島市学校評価システム専門家評価
評価委員会

評価報告について

このたび、広島市学校評価システム専門家評価「評価委員会」（以下「本委員会」という。）では、専門家評価（専門家による第三者評価）を実施し、ここに評価報告を取りまとめました。

この専門家評価は、「広島市学校評価システム第三者評価検討会議」の最終報告書で提言された実施方法等に基づいて実施しています。

専門家評価は、各学校の学校経営や教育活動の改善に向けた取組とそれに対する教育委員会の支援について評価し、学校及び教育委員会に対して意見・提言を行うことによって、学校評価の目的を果たす役割を担うものです。そのため、本委員会は、学校における自己評価活動（計画・実践・評価・改善）について専門的見地からより客観的に評価することと、学校に対しては学校経営や教育活動の改善について、また教育委員会に対しては学校への支援について、意見・提言を行うことを役割としています。

本委員会では、今年度、専門家評価を希望した広島市立小学校2校と広島市立中学校1校を評価対象校に決定し、実施しました。本委員会において、学校の状況に応じて評価の目的や評価する項目を定め、学校経営や学習指導等に専門性を有する学識経験者及び退職校長を含む評価チームを編成して、昨年10月から学校への訪問調査等を行い、その後、学校と報告案に基づく協議を行い、この評価報告を作成しました。

この評価報告にある意見・提言を踏まえ、学校での主体的な学校経営や教育活動の充実・改善に向けた取組が進むとともに、学校の取組が促進されるよう、教育委員会の適切な支援が行われることを期待します。

平成27年3月

広島市学校評価システム専門家評価

評価委員会 委員長 林 孝
副委員長 曾余田 浩史
副委員長 高妻 紳二郎

I 評価目的

深川小学校は、全教職員が共通意識をもって児童に向き合い、統一性のある指導ができる教員集団づくりに取り組んできた。その取組及び中学校区として自主的に取り組んできた小中連携を含めた学校運営の状況を評価し、その充実・改善に向けた意見・提言を行う。

II 評価項目

- (1) 総合的な状況
- (2) 児童の状況
- (3) 学校運営（教員集団づくり）の状況
- (4) 授業（改善）の状況
- (5) 生活指導の状況
- (6) その他の教育活動の状況
- (7) 小中連携の取組の状況
- (8) 環境・施設の状況
- (9) 家庭・地域と学校の関係

III 評価方法・作業

1 評価手法

今回の評価方法としては、「II 評価項目」に関する情報を、学校及び教育委員会から提供を受けた資料、管理職員及び教職員からの聞き取り、授業等の観察によって収集し、それらを総合的に分析した。

2 データ収集方法

データ収集対象	方 法
学校管理職員	聞き取り、資料提供（学校評価に関するもの、生徒の現状を把握するもの等）
教職員	聞き取り、授業等の観察
児童	授業等の観察、グループインタビュー
地域の方	聞き取り
その他（教育委員会）	資料提供（学校評価に関するもの、生徒の現状を把握するもの等）

3 作業の経過

時期	内 容	実施主体
4月	・ 専門家評価実施の通知、希望の受付	教育委員会
5月	・ 参考資料の収集・分析、対象候補校の選定	教育委員会
6月	・ 参考資料の収集・分析、対象候補校からの聞き取り（6/11） ・ 対象候補校の選定 ・ 評価委員会（評価対象校の決定） ※ 電子メールによる会議	教育委員会 評価委員会
9月	・ 評価対象校、校長からの聞き取り調査（9/2） ・ 評価委員会（評価目的、評価項目の決定、評価チームの編成） ※ 電子メールによる協議	評価委員会
10～11月	・ 評価チーム会議（評価計画、今後の予定）（10/1） ・ 学校訪問調査（教職員からの聞き取り、授業等の観察 他） （11/19）	評価チーム
12月	・ 評価チーム会議（評価報告案作成） ※ 電子メールによる会議 ・ 学校及び教育委員会から評価報告案作成に向けた意見聴取	評価チーム
1月	・ 学校及び教育委員会から評価報告案に関する意見聴取	評価委員会
2月	・ 拡大評価委員会【評価委員会・評価チーム会議】（評価報告案 他）（2/17）	評価委員会・ 評価チーム

4 評価者（評価チーム）

チーフ(評価委員)	曾余田浩史（広島大学 大学院 教育学研究科 准教授）
評価専門委員	平岡 満恵（元 小学校長）
評価専門委員	瀧口 典子（元 中学校長）

IV 評価報告

1 評価・分析結果の概要

(1) 総合的な状況

深川小学校は3年前と現在では大きく変わってきている。3年前まで、児童は騒々しく落ち着いていない状態であったが、現在は比較的落ち着いた学校生活を送っている。児童が落ち着いてきたのは、高陽中学校が荒れたことに本校の卒業生が多く関わっていたことを学校の課題として捉え、校長がリーダーシップをとり、教職員がまとまって、児童に声をかけて、しっかりとかがわり合うことに力を入れてきたことの成果である。

教職員集団も3年前までは生活指導、学習指導、児童理解、人権意識などで個の考えが強く学級王国主義に陥っており、教職員全体で共通意識を持つことが非常に困難な状況であった。しかし、ここ3年間、共通意識をもって児童に向かい合い、統一性のある指導ができる教職員集団をつくることを学校の喫緊の課題として捉え、改善に取り組んできた。平成26年度は「整える」（教室の環境、ロッカー、くつ箱、服装、傘立て、廊下歩行、時間を守る、安全面など）という言葉でその実現を目指している。この校長の方針は着実に効果が表れており、保護者にも安心感を与えている。

ただし、学力に対する考え方が学校として明確になっておらず、学力向上に対する取り組みが学校の課題として明確に位置づけられていない状況にあり、改善が必要である。

深川小学校にはいくつもの財産がある。まず、地域の支え・協力である。過去、高陽中学校が荒れたときに本校の卒業生が多く関わっていたことや、最近の教員の不祥事など、学校が自信を失うようなことがあったが、地域は学校に支援的であった。また、もち米づくりなどの体験学習は特色がある。さらに、教職員が児童にしっかりと向き合い声をかけてかがわり合うことも引き継ぐべき財産である。

「整える」の次の段階へのステップアップのために、これらの財産を生かしながら、児童の「誇り」を育て、内面を耕すことに向けて深川小学校教育に筋を通していくことが期待される。

(2) 各領域について

【児童の状況】

① 児童は比較的落ち着いている。

- ・ 正門での登下校では、全校児童の元気な挨拶を聞くことができた。こちらから挨拶をすると、多くの児童から挨拶が返ってきた。
- ・ 6年生が挨拶を頑張る姿を見せることで、5年生への良いお手本となっていて、教員は感じている。

② 3年前は朝会も騒々しい状況であり、怪我も多い状況であった。しかし、昨年度(25年度)あたりから落ち着いた状態になった。児童が落ち着いてきているのは、高陽中学校が荒れたことに本校の卒業生が多く関わっていたことを学校の課題として捉え、校長がリーダーシップをとり教職員がまとまって、児童に声をかけてしっかりとかがわり合うことに力を入れてきたことの成果だと考える。このことは地域の人や保護者からも評価されていた。

- ③ 教職員からは、深川小学校の児童の長所として素直であること、課題としてやりきることや、もうひと踏ん張りができないこと、人の目が気になること、自信がないこと、外に出て萎縮する等が挙げられた。
- ④ 児童会の児童は、学校生活に不満を持っていないと語っていた。ただし、「深川小学校をもっと良くするためには？」ということに関する意見はまだ定まっていないようである。児童会が次の学年にどのようなことを、どのように繋いでいくのかを考えていけるような指導が望まれる。
 - ・ 深川小学校の児童は人の目が気になる、自信がないという教師の声があった。それに対しては、児童が自分たちの学校・学年・学級・自分の良いところを捉え、誇りをもてるような意図的な取組が必要であろう。
- ⑤ 児童と教職員の関係が親しいことは深川小学校のよさである反面、教員の児童の呼び方（あだ名、下の名前、上の名前など）や言葉遣いにけじめがみられないと感じる教員もいた。基本的なことであり、保護者や児童の信頼を損ないやすいことなので、校長・教頭の指導が必要である。

【学校運営の状況】

- ① 3年前までは、教職員の統一性がなく学級王国主義に陥っており、生活指導、学習指導、児童理解、人権意識などで個の考えが強く、教職員全体で共通意識を持つことが非常に困難な状況であった。
 - ・ 学級ごとに指導や宿題が大きく異なるため、保護者たちも不安や不満を持っていた。
- ② 教職員のもつよさを活かしながら、共通意識をもって児童に向かい合い、統一性のある指導ができる教職員集団をつくることを学校の喫緊の課題として捉え、改善に取り組んできた。平成26年度は「整える」という言葉でその実現を目指している校長の方針は広く伝わっているし、着実に効果が表れている。
 - ・ 保護者からも、学級ごとの指導や宿題等に統一が見られるようになり、差を感じなくなって安心しているという声を聞くことができた。
 - ・ 新採用や若い先生が多いと保護者から指導力の心配の声が当初出ていたが、今では周囲の先生のフォローがあり教職員同士が支え合っているのを感じることができるとのことであった。
 - ・ 学校運営についての古い考え方が教職員の中にまだ残っているので、校長の指導が引き続き必要である。
- ③ 学年のチームワークを大切にしながら授業の進め方や生徒指導について話し合いながら指導を行なっている。
 - ・ 具体的に成果として表れている学年がある。学年主任が中心となり、掲示物、学習のまとめ、テストの評価などを合わせることができている。その一方で、まだこれからと思える学年もある。
 - ・ 若い先生が多く、中間層の先生に負担がかかっている状況にある。
- ④ 平成24年度までの「体部会」「学び部会」「心部会」「信頼部会」といった校務分掌であったものを、平成25年度より一般的な表現である名称に改め、整理・改革を行ったということであるが、教務部と研修部の関係など、教職員には分掌の仕事内容に曖昧さを残したままになっている。分掌としても仕事内容のゴールが見えない

いのではないだろうか。校務分掌組織図の再確認を行い、仕事の棲み分けを明確にする必要がある。

【授業・授業研究】

- ① 児童は授業中静かであり、静かすぎて気になる学級もあったが、集中している様子が伺えた。
- ② 学力面で学年ごとの積み上げ、日々の積み重ねができておらず、児童に漢字や計算等のスキルが身につけていないという複数の教員の声があった。
- ③ 一人1授業としてブロック別研究授業を行い、授業力向上を目指している。研究教科は個人に任されており、得意な教科を行い、お互いに学び合い授業力を高めようとしている。しかし、積み上げがなされていない状況である。言葉としては「学び合い」をすすめているが、「学び合い」の共通認識ができていない、あるいは、あやふやな状況になっている。学校としての方針をはっきりさせる必要があるだろう。
 - ・ 見学した範囲では、学び合いの場面は見られなかった。
 - ・ 高陽中学校から講師として先生を招聘し、「学び合い」を学んでいる。しかし、深川小学校教員に等しく共通理解されてはいないようである。
 - ・ 「特別支援教育の視点から」という言葉が多く聞かれた。しかし具体的には、どのように何がされているのかがはっきりとしていない状況になっている。
- ④ 授業開始時間をかなり過ぎていても、授業以外の作業をしている学級があった。教師も児童も違和感なく活動しているのを見て、日常的にあることではないかと思えた。「整える」という方針を実現させるためにも、教師の指導工夫が望まれる。
 - ・ 「体が元気」という目標を掲げ、体育の授業改善に向けて取組を行っている。ただし、運動量の確保が十分ではないと思える授業があった。

【学力向上】

- ① 学力に対する考え方が学校として明確になっておらず、学力向上に対する取り組みが学校の課題として明確に位置づけられていない状況である。
 - ・ 学力が伸び悩んでいることに課題を感じている教員もいるが、学力向上が学校の課題であると捉えていない教員も多く、危機感があまりみられなかった。
 - ・ 教職員個々の意見では、学力が伸び悩んでいる理由として、帯タイムが学年任せとなっており積み上がっていない、授業の目当てなどがきちんと書かれていない、児童の集中力がない等が挙げられた。
- ② 昨年度も学力調査について分析（Check）を行なっているが、それが改善（Action）に結びついていない。PDCAサイクルをきちんと機能させることが課題である。
- ③ 学力向上に対する保護者や地域からの意見・要望はあまり出ていない。しかし、学力保障は学校の使命であり、学力向上に対する保護者・地域からの意見が出ないと安易に捉えていてはステップアップできないと思われる。

【その他の教育活動】

- ① もち米づくりや深川ランチなどの体験学習は特色があり素晴らしい実践である。
 - ・ とくに、もち米づくりは全学年が分担して取り組むことで、学校の一体感につながっていくだろう。

- ・ これらの実践が温かい地域の人たちに支えられていることなどを子どもたちに引き続き、より一層強く伝え、誇りを持って生活するように指導していただきたい。体験学習などで深まった地域の人たちへの感謝、尊敬の念を手紙や文章に表現するなどによって、学びを深め、心を育てる取組として行なっていただきたい。
- ② 「深川小学校を支えている教育力は？」への答えが教職員から返ってこなかった。教職員が深川小学校について語るができるようになってほしい。
- ③ 帰りの会の取り組みが学級ごとにばらばらで、隣の学級の歌や騒音で自分の学級の取り組みが十分に出来ていないところがあった。歌は会の終了〇分前からなど、せめて同学年では統一したプログラムが必要ではないだろうか。

【家庭・地域と学校の関係】

- ① 地域の支え・協力という大きな財産がすでにある。
 - ・ 過去、高陽中学校が荒れたときに深川小学校の卒業生が多く関わっていたことや、最近の教員の不祥事など、学校が自信を失うようなことがあったが、地域は学校に協力的で、地域で子どもたちを育てようとする力強さを感じる。
- ② P T Aからは、学校と保護者の距離は近いと、不満や要望の声は聞かれなかった。話があれば校長に直接話に行く人が多いのではないかという反応であった。懇談会では、子どもの様子を伝えてもらっているということである。保護者と担任の間で本音の話ができているのかが少し気になったが、保護者からは安心感の声を聞くことができた。
 - ・ 校長が保護者を覚えていて、気軽に声をかけてくれることに保護者は喜んでいてP T A役員は話していた。
- ③ 生活科（昔あそび）や学校田でのもち米づくりなどの体験学習は、保護者も手伝いというかたちで参加しており、学校側も地域の協力を支えられているという感謝の思いを持っている。毎年繰り返される体験学習ではあるが、学校の変化を見せることで、より一層学校への期待感が生まれると思われる。
- ④ 公民館長が、児童や生徒、保護者、地域、学校（校長）に対して支援をしている。
 - ・ 大人が子どもたちに声をかけていくことが大事という館長の話や講話は押しつけがましくなく、質が高いと感じる。中学校長の経験を生かしながら、子どもの心に寄り添い、小中学校（校長）を側面から支えている。

【小中連携の取組状況】

- ① 校長が3人で話し合う機会を月1回持っている。さらに具体的に、小中間、小小間でどう交流し連携するのか、何を取り組むのかを明確にしたほうがよいのではないだろうか。
 - ・ 校長たちは連携して話し合っているが、教頭以下はそこで何が話し合われているのかを知らない様子だったので、企画運営委員会などで情報として伝えることがあってもよいと思われる。
- ② 掲示物について、中学校に関するもの（たとえば体験入学プレスクールなど）が6年生の教室に見られなかった。
 - ・ 中学校進学に際して、新しい教科や友達関係に不安はあるが、クラブ活動を楽しむにしており期待を持っている。期待がよりふくらむように児童への情報提供

を丁寧に行なうことを期待したい。

- ③ P T Aにおける高陽中学校や狩小川小学校との連携は、会長が主に行っている。連携の難しさもあるが、高陽中学校の挨拶運動に参加できればという思いを持っておられる。
- ④ 学校評価の面でも連携を持つことができればと思う。9年間の子どもの育ちという視点から、評価の入り口（小学校入学）と出口（中学校卒業）が繋がることができればと考える。

2 意見・提言

(1) 深川小学校に対して

① 学力向上を学校評価に位置づける

学力保障と成長保障は学校の使命であり、深川小学校にとって学力向上は喫緊の課題である。ゆえに、学力向上の成果が上がっていない原因をしっかりと分析し、学力向上を図るための取組を明確化して学校評価に位置づける必要がある。

- ・ 授業研究のあり方を再検討し、学力の積み上げを検討してほしい。授業研究が教員の授業力・指導力向上にどのような成果があったのか、さらにそれが学力向上の積み上げにどのような成果があったのか、その反省をどう生かしていくかと評価サイクルを機能させることが大切である。
- ・ 帯タイムの指導計画について6年間を見通しての再検討が必要である。
- ・ 保護者に学力への関心を持ってもらう工夫も必要であろう。深川小学校は、学校評価アンケートを丁寧にとっているので、単純集計だけでなく数年の傾向を示したり、参観・懇談の場で保護者のアンケートをとることもあってよいのではないだろうか。例えば、授業のねらいや工夫、つけたい力、これまでの・これからの指導の繋がり等についてである。

② 児童の最終的に目指すところ（児童の内面の誇り）の明確化

深川小学校は現在「整える」ということに力を入れているが、「整え」た次の段階を想定しながら、「自分たちはこんなことができたよ、もっとこんなことができるよ」と児童の「誇り」を育て、内面を耕していくことが望まれる。そのために、深川小の児童が最終的に目指すところ（児童の内面の誇り）を明確にする必要がある。たとえば、体験学習を通して何を育てていくのか。「整える」も体験学習も、児童の最終的な姿・目指すところへ行くための手段であろう。深川小学校教育に筋を通し、母校としての誇りをもたせていくことが義務教育の役割の一つでもあると考える。

③ 授業研究について

深川小学校教育に筋を通すことと密接に関連するが、次年度以降の授業研究で何に取組むのが深川小学校のこれからの学校づくりの筋（軸）となる。道徳の授業を中心に取組むというのが校長の意向である。道徳は学力向上にとって大切な部分であると思うが、道徳のみに特化して喫緊の学力向上という課題が解決できるであろうかという危惧がある。方針は深川小学校の存在意義を捉えたいうえで示す必要がある。もし道徳を中心とするのであれば、教職員や保護者にも考えを伝え納得を得ることが重要であろう。

④ 企画運営委員会の充実

企画運営委員会は学校経営にとって最重要である。回数を減らしたいという声があったが、減らすべきではない。学校の問題解決力を高めるためにも、教頭やミドルリーダーを育てるためにも、しっかりと意思疎通を行ない、校長の考えをしっかりと伝え、各主任から提案が出るように充実させていきたい。

(2) 教育委員会への要望

- ① これからの学校づくりの柱として道徳に力を入れていく予定なので、学校を引っ張ることができる道徳教育推進リーダーに相応しい人材が必要である。
- ② 臨採が多く（現在6名）、40代のミドルリーダーに過度の負担がかかっているため、できうるかぎり臨採を少なくする等の人事上の配慮が必要である。
- ③ 深川小学校にとって授業研究がこれからの学校づくりの軸となる。そのための講師の招聘、県外視察（とりわけミドルリーダーを育てるため）、研修のための本の購入のための支援をお願いしたい。